サイン

年　　組（　　番）名前　　記入日　　月　　日

「ヒロシマの抱擁」忘れぬ

6年前に広島を訪れたオバマ元米大統領と抱擁を交わした被爆者の森重昭さん（85）（広島市）が、その場面が描かれた油彩画を山口県柳井市の私設の平和記念館に寄贈した。森さんは長年、被爆死した米兵の調査に尽力。米兵の最期に深い関わりのある同市に平和記念館が開館されることを知り、「多くの人に絵を見て平和の尊さを感じてほしい」と贈った。

■オバマ氏演説

オバマ氏は2016年5月、米国の現職大統領として初めて広島を訪れた。平和記念公園で開かれた式典で演説し、「核なき世界」を訴える中で、こう語った。

＜ある男性はここで犠牲となった米国人の家族を捜し出した。彼にとって、米国の犠牲も日本の犠牲も同じだと信じていたからだ＞

米国側からの招待で出席していた森さんは貴賓席で「自分のことだ」と思った。その直後、感極まって涙ぐんだ森さんをオバマ氏は優しく抱き寄せた。

油彩画にこの瞬間を描いたのは富山県の画家、才田峰風さん（60）。新聞の朝刊に載った写真を目にして「原爆を落とした国と、落とされた国の人が抱き合う歴史的瞬間を描きたい」と制作し、16年7月に森さんに贈った。

森さんは「感動が鮮やかによみがえる作品」と絵を大切に保管してきた。

寄贈された油彩画

■米兵も犠牲

森さんは8歳の時に被爆。爆風で川に吹き飛ばされたが、一命は取り留めた。

戦時中に米兵捕虜が広島市内の施設に収容され、被爆死していた事実を知ったのは、1970年代になってからだった。当時、被爆死した米兵の情報は公開されていなかった。衝撃を受けた森さんは、「敵も味方もない、全ての人が同じように追悼されるべきだ」と身元や死亡の経緯などを調べ始めた。米国に電話をかけるなどして遺族も捜し出した。

結果、12人の米兵が収容中に被爆死していたことが判明した。うち6人はB24爆撃機に搭乗中に柳井市で墜落。生き残ったが、広島市の施設に収容された後、原爆が投下された。

柳井市には調査などで何度も訪れ、爆撃機の破片も見つけた。市内の墜落現場には1998年、地元住民らが「平和の碑」を建立し、99年には生き残った機長が訪れて一緒に追悼した。

森さんは今年6月、同市に平和記念館ができると知り、「米兵たちの最期に関わる地で展示してほしい」と寄贈を決めた。

（2022年8月4日　読売新聞夕刊より）

1 次の出来事のうち森さんが行ったことを選び、時期が古い順に並べましょう。

① 絵を手放し山口県の平和記念館に贈った。
② 平和記念公園で「核なき世界」を訴えた。
③ 被爆死した米兵について調査を始めた。
④ B24の墜落現場に「平和の碑」を建立した。
⑤ 米国側の招待で、平和記念式典に出席した。

2 傍線部で書かれているのと同じ思いを示す表現を、本文中から26字で抜き出しましょう。

3 記者が、見出しを「ヒロシマの抱擁」としたのはどのような思いからだと考えられますか。理由を説明した下の文章の□に当てはまる言葉を記事中から28字で抜き出し、文章を完成させましょう。

オバマ氏と森さんの抱擁は、

であることを強調したかったから。

©読売新聞社 2022年　無断複製・転載を禁じます

★★ よむ YOMU ワークシート no.14 「ヒロシマの抱擁」忘れぬ ＜解答編＞

「ヒロシマの抱擁」忘れぬ

6年前に広島を訪れたオバマ元米大統領と抱擁を交わした被爆者の森重昭さん（85）（広島市）が、その場面が描かれた油彩画を山口県柳井市の私設の平和記念館に寄贈した。森さんは長年、被爆死した米兵の調査に尽力。米兵の最期に深い関わりのある同市に平和記念館が開館されることを知り、「多くの人に絵を見て平和の尊さを感じてほしい」と贈った。

■オバマ氏演説

オバマ氏は2016年5月、米国の現職大統領として初めて広島を訪れた。平和記念公園で開かれた式典で演説し、「核なき世界」を訴える中で、こう語った。

＜ある男性はここで犠牲となった米国人の家族を捜し出した。彼にとって、米国の犠牲も日本の犠牲も同じだと信じていたからだ＞

米国側からの招待で出席していた森さんは貴賓席で「自分のことだ」と思った。その直後、感極まって涙ぐんだ森さんをオバマ氏は優しく抱き寄せた。

油彩画にこの瞬間を描いたのは富山県の画家、才田峰風さん（60）。新聞の朝刊に載った写真を目にして「原爆を落とした国と、落とされた国の人が抱き合う歴史的瞬間を描きたい」と制作し、16年7月に森さんに贈った。

森さんは「感動が鮮やかによみがえる作品」と絵を大切に保管してきた。

寄贈された油彩画

■米兵も犠牲

森さんは8歳の時に被爆。爆風で川に吹き飛ばされたが、一命は取り留めた。

戦時中に米兵捕虜が広島市内の施設に収容され、被爆死していた事実を知ったのは、1970年代になってからだった。当時、被爆死した米兵の情報は公開されていなかった。衝撃を受けた森さんは、「敵も味方もない、全ての人が同じように追悼されるべきだ」と身元や死亡の経緯などを調べ始めた。米国に電話をかけるなどして遺族も捜し出した。

結果、12人の米兵が収容中に被爆死していたことが判明した。うち6人はB24爆撃機に搭乗中に柳井市で墜落。生き残ったが、広島市の施設に収容された後、原爆が投下された。

柳井市には調査などで何度も訪れ、爆撃機の破片も見つけた。市内の墜落現場には1998年、地元住民らが「平和の碑」を建立し、99年には生き残った機長が訪れて一緒に追悼した。

森さんは今年6月、同市に平和記念館ができると知り、「米兵たちの最期に関わる地で展示してほしい」と寄贈を決めた。

1 次の出来事のうち森さんが行ったことを選び、時期が古い順に並べましょう。

① 絵を手放し山口県の平和記念館に贈った。
② 平和記念公園で「核なき世界」を訴えた。
③ 被爆死した米兵について調査を始めた。
④ B24の墜落現場に「平和の碑」を建立した。
⑤ 米国側の招待で、平和記念式典に出席した。

③⑤①

新聞記事では、起きた順番に出来事を書くとは限りません。現在に近い出来事をまず書き、昔のことはその後に持って行く場合も多く見られます。

2 傍線部で書かれているのと同じ思いを示す表現を、本文中から26字で抜き出しましょう。

敵	も	味	方	も	な	い	、	全	て	の	人	が	同	じ	よ	う	に	追	悼	さ	れ	る	べ	き	だ

傍線部の直前を読むと、「ある男性」が「犠牲となった米国人の家族を捜し出した」時の思いだをわかります。「ある男性」とは森さんのことですね。森さんが米国人の犠牲者について調べた時のことが書かれた部分に、答えがあります。

3 記者が、見出しを「ヒロシマの抱擁」としたのはどのような思いからだと考えられますか。理由を説明した下の文章の□に当てはまる言葉を記事中から28字で抜き出し、文章を完成させましょう。

オバマ氏と森さんの抱擁は、

原	爆	を	落	と	し	た	国	と	、	落	と	さ	れ	た	国	の	人	が	抱	き	合	う	歴	史	的	瞬	間	

であることを強調したかったから。

オバマ氏と森さんが交わした抱擁の重要性を書いた表現を見つけられましたか。

©2013 そにしけんじ／読売新聞社

読んでみよう！

◆ミー太郎のおすすめ記事

原爆証言 絵画でつなぐ

■広島の高校生「共同制作」15年

広島の高校生が高齢の被爆者と1対1で対話を重ね、原爆投下後の状況を絵画として「共同制作」する活動が今年で15年を迎えた。原画や複製パネルの展示が各地で行われ、全国の学校との交流も広がる。ロシアによるウクライナ侵略で核兵器の脅威が高まる中、過酷な体験を若い世代に継承する教育的な意義も注目されている。

「次世代と描く原爆の絵」と題して絵画を制作しているのは、広島市立基町高校で美術を学ぶ生徒たち。2007年から毎年希望者を募り、普通科・創造表現コースの有志が参加。これまでに油彩画を中心に約180点が完成し、携わった生徒は約160人、証言者は約50人に上る。

被爆の資料を収蔵する広島平和記念資料館が同校に協力を求めたのがきっかけ。同館などで活動する被爆体験証言者は修学旅行生らに講話を行っているが、被爆直後の写真資料はわずかで、「体験を基にした絵があれば伝わりやすい」という声が上がっていた。

当時同校の美術教諭（現・非常勤講師）だった橋本一貫さん(63)は「生徒が原爆や平和について深く学ぶ機会になる」と快諾。希望した生徒は約9か月かけ、資料館が募った証言者と十数回も打ち合わせを重ね、放課後などを活用して一つの場面を丹念に描く。凄惨な題材も多いが、途中でやめた生徒はいないという。「原爆で人々の生活が突然崩れたことを理解し、絵が完成する頃には平和について自分の言葉で話せるようになる」と橋本さんは話す。

3年生の山口伶さん(18)が今年描いたのは、当時15歳の切明千枝子さん(92)が、がれきの中で炭のように焦げた幼児につまずき、合掌した場面。「以前は原爆の写真を見るのが怖く、中学の平和学習には興味を持てなかった。切明さんが涙をこらえて話すのを1対1で聞いて、被爆体験を身近に感じた」と振り返る。

切明さんは「今の高校生には想像もつかない悲惨な状況を絵にしてもらい、感謝しています。ロシアが核兵器をちらつかせる中、平和を守ることの大切さが若い世代に伝われば」と訴える。

高校生の祖父母の世代も戦争体験者が減り、生徒が証言に接するのは貴重な機会だ。指導する同校講師の福本弥生さん(38)は「生徒が被爆者の方と思いを重ね、絵を通して社会ともつながることに意味がある」と強調する。

（２０２２年８月１７日　読売新聞朝刊より）

どのような過酷な出来事も時間とともに忘れられる恐れがあります。

記憶を継承する努力が欠かせません。

©2013 そにしけんじ／読売新聞社